

喜多村が大阪で成美団を結成した時、京都の寄宿先の戌井家が祝儀として贈ったのが紋付一揃いだった。以後みどり屋の紋所は笹りんどうであった。幼時私は楽屋で祖父が男から女に変わって行くのを見るのがいやだった。成人になって芝居の道に入ることを祖父に話すと、人に頼るな、と言つて明石の鳥藏の女形の扮装のま、胡座でそれが癖の足の裏をビシヤビシヤ叩いてついで部屋を出て行った。新年の挨拶に龍土町の家へ行くとき愛犬のシェパードに尻を噛まれたが私は我慢した。それから家にも楽屋にも行かず芝居は木戸銭を払つて三階で見た。「婦系図」の湯島より鳥森の待合の場の幕切れ「早瀬さん、褒めて下さい」を巧いと思つた。六代目との「一本刀土俵入り」には感動した。私が文学座に入ったことを祖父は私の師、久保田万太郎から聞いたらしい。「女の一生」や私が演出したものを見に来た。戦後一、二度新派の演出した時祖父はもう八十数才の老健だった。私はいま齢だけは祖父を超えて九十三才になった。



麻布龍土町の自宅にて

編集の森井マスマスミさんを大学で教えた関係で、こんどの日記の校正刷り閲覧の機会を与えられた。喜多村日記の面白さが、毎日の舞台の工夫と芝居へのきびしい態度、新派の人間模様にあるのは当然として、食事や買物などの日常記事が風俗史的魅力に富むのは既に定評がある。今回の昭和五年から昭和十二年までの新公開分では、そうした分野の記述が一段と濃い内容をもっている、そうした期間にも大阪での滞在が長く、大阪に住む私はそのうした大阪の事事にとくに引かれる。時あたかも都市の爛熟期だった大阪で、喜多村の新大阪ホテルでの宿泊、毎日のアラスカでの食事、かかりつけの医師、行きつけの理髪店まで、同時代をすごした私には迫真の興味があった。日記に垣間みる一九三〇年代の豊かな都市生活、東京は勿論、地方公演が多く、その都市ごとの風景またしかり。広い読者層へ尽きぬ話題を提供するにちがいない。



「婦系図」伊井蓉峰の主税と

喜多村緑郎は一代の名女形であった。もつとも私が喜多村を見はじめた時、すでに喜多村は七十歳をたくくにこえていた。にもかかわらず、喜多村にはしたたるような色気があった。その色気は、歌舞伎の女形とは違うリアル感からくる。喜多村の声は低くて聞こえにくかったが、よく聞くと「女」を描いて一分のスキもなかった。「婦系図」のお蔭も「日本橋」のお孝も実に魅力的だったのは、そのリアルさのためであった。それだいて喜多村は肝腎なところでは、パッと花が咲いたように様式的になる。写真と様式。そのバランスの絶妙さが喜多村の芸であった。しかし喜多村の素顔は、意外にもダンディに洋服を着こなし、パイプをくゆらせ銀ブラを楽しむイギリス風の紳士であった。



新派喜多村緑郎日記 全3巻

2010年6月より
3ヶ月毎刊

各巻平均予価16,800円(本体16,000円+税5%)
A5判・上製本・カバー・平均500頁 ISBN978-4-8406-9420-9 C0374
※本書は分売いたしません。全3巻セットでお申し込み下さい。

- 第1巻 昭和5年～昭和7年《新派の復活》
- 第2巻 昭和8年～昭和10年《新派の躍進》
- 第3巻 昭和11年・昭和12年・索引《新派創立五十周年》

ご購入のご案内

170 —パン—チキンカツ—スーッパ—紅茶。
カフェエをひ可へる。
昭和5年 林の忌日として朝飯は精進をする。
部屋でも、今日は紙らぬことにして、読書をつまける。
高橋氏に狂言のことについても、その他一座の生活の法についても話合ふ。
河合の説—高橋氏がいつか、三人協議を欲するといつた—
—によると、狂言は役者にも相談をしろ、といふのだといふ。
勿論い、が、それは、一歩あやまる、新派を導いた前右の飯をふむことなることを注意しておく。本当に考へない、考の上つちら行く後等のやうなものが多いで新派の発展をまたげるとおもふ。
十月十日 晴
一日はしに頭数は消えるやうにおもふ。
芝居からの帰途、だから、へいつて妻と高倉つて天からや、くつて返ぬ。
ルパンは袋に運動をさせに出す。
当は、きのお食事を控えたのと薬の加減がいくつか異いやうだ。
ルパンは椅子へ乗つて、割のパンを俵のたべる相性させるの
で、必ず食事の時はそれへの。
大どおれすることが日課となる。
本をよむ。改述へのつた。—十月の増大分—浮田四十の「ママ先生とその去」を読む。如何にも僕にかいたといつてもよきそうなるのだ。昨日、竹葉若がさういつてあだが、全く流れるとおもふ。
所得税増徴とあつて、徴達正とが来たといふ。所得税は、大分前、去年の増徴にしたといふので若井を以てその異議を申立て、あるで増徴ではなく解決してないといふ訳であるよし英がいつたら、来たものは、願望か、一応可いつてその由を告げんといふことであつたといふ。
十月十一日 曇
十一日 晴
日曜に3、4日
家がいよへく借りることに決す。
午時過ぎに又●借家へゆき、広崎やの主人を牛ふ。広崎二階の六畳建の地、下の茶の居間のマントルピースの上の足。等々。壁を直してもうひたい申込んでおく。
衣から見ると、萬などかうみあるもあるが、若々感ある感じがする。然し中はとにかく住めるこしらへだ。

近代演劇の基礎を確立した新派の名優が
昭和戦前の演劇界・文化・風俗の
移り変わりを
克明に記す。

新派の動向・興行の実態、歌舞伎・新劇との関わり、
劇作家・小説家をはじめとする文化人との交流、
昭和のモダン生活者として世相を映した貴重な記録



紅野謙介
森井マスマスミ編
全三巻

新派喜多村緑郎日記

昭和5年
〜12年

八木書店

The diary of the outstanding shinsa actor, one of the founders of Japanese modern theatre, vividly depicts theatrical and cultural transitions in the prewar Showa era. It covers various accounts of shinsa theatre regarding its overall movements, each production, relations with kabuki and shingeki, and interactions with intellectuals such as playwrights and novelists. Above all, the author's viewpoint as a Showa modernist makes the diary a valuable record of the society of the day.

写真：柏家夏吉

梅若実日記

梅若六郎・鳥越文蔵監修／梅若実日記刊行会編
【編集委員】印藤英明・氣多恵子・小林真・佐藤裕子・城崎陽子・永井美和子・西野春雄・林和利・三浦裕子・渡辺博之
定価 88,200円 A5判 平均 460頁、総 3,218頁 ISBN4-8406-9640-3 C0374

従来門外不出の資料として梅若家に伝わる、嘉永二年から明治40年までの60年間の日記を翻刻。梅若実は親世流の代表的な能役者で、徳川幕府崩壊後、宝生九郎とともに、東京で能界を守った立て役者。新政府の高官にも積古をつけるなど、幕末維新以降の激動の時代の文化史の実体を包み隠さず示す。能楽の実際以外にも、日常生活で見聞きした文明開化の実体や、日清戦争・日露戦争などについては、一庶民としての一喜一憂の様子が驚くほど丹念に描かれている。

申込書	紅野謙介・森井マスマスミ編・八木書店刊 Tel.03-3291-2961 Fax 03-3291-6300 取扱店(番線印)	
	新派名優 喜多村緑郎日記 全3巻 [] セット	
	ISBN978-4-8406-9420-9 C3021 各巻定価 12,600円 (本体12,000円+税5%)	
	お名前(ふりがな)	TEL
ご住所 〒	FAX	E-MAIL

喜多村緑郎日記の刊行について

紅野 謙介（日本大学教授）

新派俳優・演出家として知られる喜多村緑郎は、女形という日本の演劇伝統を受け継ぎながら、同時に近代演劇としてリアリズムを追求する狭く困難な道のりを歩んだ。新派は、泉鏡花「婦系図」や「日本橋」、徳富蘆花「不如帰」をはじめ、多くの文学作品を脚色し、上演してきたが、

今も残る新派古典の演出はほとんど喜多村の手になるものでもある。日本の近代文学は演劇や映画に原作を提供することによって、より多くの人々に知られ、新たな読者を獲得した。近代文学と演劇の関係はきわめて深いものがあるが、なかでも喜多村は泉鏡花や谷崎潤一郎ら文学者との交流も深く、幅広く文学への目配りを欠かさなかった。その喜多村緑郎の長期間にわたる日記が日本大学および早稲田大学に残されていた。かつて喜多村の没後すぐ、演劇出版社が『喜多村緑郎日記』として刊行したのは、一九二三年から一九二九年にかけての記録である。

今回、あらためて公開することになったのは、そのあと一九三〇年以降、都市モダニズムの波のなかで演劇が活性化し、新派の最盛期を迎える時期のものである。喜多村は六十代を迎え、円熟の境地にあった。細かく書き込まれた日記には、詳細な上演の記録とともに、俳優や演劇関係者とのやりとり、演劇や脚本・演出への思い、文学者との交遊などが大きく変化を遂げた都市風景のなかに描き出されている。近代文学・演劇に関心を寄せるものとして、まさに今回の刊行は大きな喜びでもある。

●日記拾い読み

【小説の作劇法】 昭和5年2月23日

〔前略〕岸田氏から「旗江劇」についての役柄をよくきく。小説としては、説明があるからいゝが、ステージの上としては甚だ見るものに性格が分るまい。伊井も「変態性慾者でないといふ役柄の説明で」役を引上げたといふ。この人は、ものごとを人間味に解さないところがおもしろい。

【歌舞伎座大部屋のストライキ】 昭和6年2月4日

〔前略〕昨夜新歌舞伎座の大部屋連が、ストライキを起したといふことについて河合から電話で、「兎に角、興行道往だから今、初日がで、から二日目に罷業するのはよくない。」といふことを、いつてきたが、翌日あつて話したいといふので今日はそれをまつことになったが、昨夜遅く、渡辺が石井の所の書生と一緒にきたので、事情もきいたが、中川が断りなしに、八分にして金を渡したといふのが問題の原因といふ。断つたといふのださうだが、絶対に断つてないことは、僕の処へそのことを――歩にしたといふ――いつてこないのでも知れてゐる。然し、今大部屋が、その部属してゐる師匠の許可なくその問題を起すのは道に違ふといふことに帰するのだ。理があつて非におちるといふこと。その他についても、よくいつてきかせておいた。〔後略〕

【伊井蓉峰の死】 昭和7年8月15日 晴驟雨

〔前略〕光一が伊井の訃報をもたらせてかけた。――危篤といふ知らせといふ。――もう駄目だ。と直覚した。だが全く信じられぬ迄自分は自身を疑ぐつた。この目でみて、今日この頃世を去る人とは思はなかつたものが事実の上に現はれてこの報を聞く。危篤といふのはなくなつたといふのと此際同様である。

直ちに帰宅して支度してゆく。今あはて、いつた処で、間に合ふものでないと覚つて、まづ、久保田、服部へ通知して、出てゆく。これからは委しくかくまでもなく。大黒柱を――それも只一本でさ、へてみた柱を、根から倒されたのだから、とかくいふまでもない。〔後略〕

【江戸川乱歩を読む】 昭和8年8月29日

〔前略〕江戸川乱歩の「うごめく触手」を読む。インチキだが、やつぱり彼はこなれて居る。妻を相手の二人麻雀、興はないが銷夏の一つだ。今日は牌勢妻の方がよし。多くサロンに居て本をよみ、台詞を覚える。楽に覚えられる。いゝ意味の修養だと思つづく思つた。

【田中絹代、エンタツ、アチャコを観る】 昭和10年6月25日

〔前略〕帰途、大阪劇場の「春琴と佐助」をみる。田中絹代の大阪言葉がうまいと思つたら大阪の人間とか長く大阪にみたとかいふこと。佐助をしてゐる高田といふのは大阪者といふ。そこに破綻がないことになる。原作に忠実だ。田中といふのが一寸味があつた。二人共芝居らしくなるとまだくだが、日本物としてはわるくないとおもふ。藤原氏へよつて楽屋へゆく。役を了へてから、竹川連れに誘はれて花月へゆく。「エンタツ」の一つあとへ「アチャコ」の組合せがある。まづい組合せと思ふ。柳、山田、竹川連、と森田で肉を馳走になつて竹川へよつて柳に戻る。

【二二六事件当日】 昭和11年2月26日 雪

〔前略〕午前八時起きて、入浴してのち支度を整へて九時十六分の列車にのる。――熱海には稀らしい雪の降りかたで、勿ちにして地を塗り消して居た。粉雪で風も交つて積つてゆく。

駅へくると、ポーターが「椿事が出来ました。」と告げる。何か？ と訊くと、「牧野前内首が湯河原の別荘とかで、薩摩の軍人に襲はれて機関銃をもつて殺戮したといふのであつた。……湯河原は大騒ぎでせうと聞いて、列車にのつてから湯河原の駅を通つてみたが別に平時と變つたこともなかつた。〔中略〕途次円タクの話す処によると、要路の大官の多くが虐殺されたといふことだつた。皇居を圍繞して鉄条網を張り、機関銃を備へて戦時の如しといふ。――三宅坂方面は交通を断たれて居る由。――実に大事件である。往時の「雪の桜田」を思ひ浮かべるわけだが、それは一人の大老に対してが、これはその数の多いこと、さういつた比ではない。いづれにしても市民の安寧をおびやかすものではないといつても、かつて一寸ためしがない。――〔中略〕芝居は、とにかく今日一日休むに決す。〔中略〕東京の事件が、十時頃初めて号外をゆるされたとみえて売つて居る。勿論くはしいことはかいてない。内大臣兼任、総理大臣、後藤氏！

【八重子・河合部屋争い】 昭和12年12月30日

〔前略〕部屋の件できのふから小耳にはさんでゐたが八重子と、河合の部屋争ひなのだ。いつも河合の部屋としてゐる処が八重子が前にゐた処だといふので何か前々から頭取がきいてゐたといふのだが――きのふからまだ納まらぬ由にて、「柳」が、相談といふか報告といふが、とにかく話にきた。部屋を両方に使はせるな！ といつてやつた。河合は、問題を更新会に訴へてきた。――さういつた形ちだ。――もつと河合が強く自分ではんばるべきだとおもふがそこが、ずるい彼のこと、てこつちへよりか、つてきた。――だがさうなると止なく起たなければならぬことになる。芸術座と、新派。馬鹿氣でゐる話にならない。とにかく以後水谷と舞台をともにしないといふことにまでなるわけだ。



昭和6年当時の緑郎



一本刀士俵入 六代目菊五郎



黄楊の櫛



藤十郎の恋



真景累が淵 豊志賀



日本橋 お考



菊若葉 お常（た）

●本書の特色

◆日記の概要 喜多村緑郎は筆まめで、明治24年以降からの自筆の演劇関連資料や観劇メモを残している。現在日記としてまとまった形で残っているのは、大正12年以降、昭和33年までのもの。多くは市販の日記帳に書かれている。大正12年、昭和4年までの日記は、昭和37年に演劇出版社から刊行された。その年の毎日出版文化賞を受賞した。しかし、遺族の意向で、一部割愛した部分がある。本書では、著作権者の了解を得、歴史的資料として、全記述をそのままに翻刻した。翻刻に当たっては、旧字を新字に改めるほか、明らかな書き間違い、漢字の誤用、読みにくい送りかな等を、喜多村の文章を損なわない程度に訂正し、読みやすさを考慮した本文を提供することを心がけた。

◆多彩な交流 役者・劇場関係者の他、小説家・美術家などの文化人や市井の人々との交流から、昭和戦前の文化や風俗の有様が、生き生きと伝わる。

◆貴重な演劇資料 興行演目の決定から稽古の日程、毎日の芝居の出来不出来、観客数の多寡、観客の質など、劇評や興行記録では分からない、芝居の実態が如実に記されている。

◆新派の実態 伊井蓉峰・河合武男・水谷八重子など共演者との関わりや、若手に対する演技指導、歌舞伎役者との共演の感想が随所に記されている。

◆モダン生活 探偵小説を中心とした読書家、美食家、愛犬家としての日々の記述の他、歌舞伎や映画、寄席芸などの感想が、随所に記され、昭和初期のモダン都市生活の実態が魅力的に記されて興味尽きない。

●喜多村緑郎略年表

- ◆一八七一（明治4）年7月23日、東京日本橋橋町の葉種問屋に生まれた。本名六郎。11歳の時、関宿にある本家の干鰯問屋へ商業見習いにやられ、20歳までをそこで過ごす。
- ◆一八九二（明治25）年、20歳。北村みどりの名で初舞台。伊井蓉峰に誘われて青柳捨三郎一座に加わる。伊井らは旧派である歌舞伎劇に対して、新しい近代演劇を目指し活動をはじめていった。
- ◆一八九六（明治29）年、24歳。秋月桂太郎、高田実、小織桂一郎と、大阪道頓堀角座で成美団を結成。以後10年間大阪を拠点に活動、リアリズム演劇をめざした。
- ◆一九〇六（明治39）年、34歳。東京に戻り、本郷座に出演。新派の全盛時代を築く。
- ◆一九一六（大正5）年頃、44歳頃。伊井蓉峰、河合武雄と共に新派三頭目の時代を築く。
- ◆一九四八（昭和23）年、76歳。日本芸術院会員に選出。
- ◆一九五五（昭和30）年、83歳。重要無形文化財保持者（新派女方）に認定。文化功労者となる。
- ◆一九一〇年前後から一九二〇年代、三〇年代にかけて新派の全盛期を支え、新派文系の芸を完成した。当たり役には泉鏡花作「婦系図」のお福、徳富蘆花作「不如帰」の浪子などがある。また花柳草太郎や先代水谷八重子の師匠でもあり、一九五九（昭和34）年11月明治座の『近松物語』の伯母お米役が最後の舞台となった。劇界きつての文学通としても知られ、泉鏡花や谷崎潤一郎など作家との交流も深い。
- ◆一九六一（昭和36）年5月16日死去。享年89歳。勲三等旭日中綬章受章。
- ◆一九六二（昭和37）年。没後に刊行された『喜多村緑郎日記』（演劇出版社・収録年数は大正11年、昭和4年）は、毎日出版文化賞を受賞している。

●新派のシムロ

明治維新による文明開化の流れの中で、板垣退助らの自由民権運動が起こると、芝居で政治思想の宣伝手段のひとつとして、壮士芝居がはじまった。一八八八（明治21）年、角藤定憲が大阪の新町座で旗揚げしたのを皮切りに、川上音二郎も大阪の堺で活動をはじめ、まもなく浅草に進出。世相を風刺した「オツベケベ」節で人気を博した。これに続いて伊井蓉峰は、政治色を排した純粋な演劇運動を目指して、男女合同改良演劇「済美館」を結成して、浅草の吾妻座（のちの宮戸座）で旗揚げした。山口定雄、福井茂兵衛も新劇団を組織し、これに続いた。当時の出演者は、高田実、藤沢浅二郎、喜多村緑郎、河合武雄、井上正夫らがいるが、舞台の形式は、歌舞伎の模倣を出るものではなかった。

しかし、二十世紀をむかえる頃から、文壇との接触もさかになり、小説の劇化や西欧の翻訳物を手がけると同時に、独自の芸風が確立され、旧派（歌舞伎）に対して新派の呼称も生まれた。この時期に初演した『金色夜叉』『不如帰』『薄の白糸』『婦系図』などは、新派の名狂言として、後世まで演じ続けられている。

●喜多村緑郎日記に登場する主な文化人

〔俳優〕伊井蓉峰・河合武雄・小織桂一郎・花柳草太郎・梅島昇・英太郎・伊志井寛・村田武郎・上山草人・早川雪洲・井上正夫
〔歌舞伎役者〕尾上菊五郎・中村鴈治郎・市村羽左衛門・中村歌右衛門・尾梅幸
〔女優〕川上貞奴・水谷八重子・森律子・村田嘉久子・森赫子・筑波雪子・市川紅梅・岡田嘉子・山田五十鈴

〔文学者・劇作家〕泉鏡花・菊池幽芳・谷崎潤一郎・長田秀雄・里見淳・長田幹彦・吉井勇・中村松太郎・長谷川時雨・山本有三・久保田万太郎・川口松太郎・村松梢風・長谷川伸・川村花菱・松居松翁・沖野岩三郎・水上瀧太郎・瀬戸英一・江戸川乱歩・岡田八千代・内田百閒・久米正雄・獅子文六（岩田豊雄）・真山青果・岸田國士・水木京太・生田葵山・高田保泰
〔劇評家・学者〕伊原青々園・笹川臨風・瀧実清太郎・川尻清潭・三宅周太郎・岡鬼太郎・河村繁俊

〔美術家〕岡田三郎助・小村雪岱・木村荘八・伊東深水・大橋月皎・伊藤薫朔（舞台美術）
〔劇場関係者〕大谷竹次郎・白井松次郎・宇野四郎（演出）・城戸四郎・小林一三
〔その他〕歐洲樓燕枝（落語家）・村屋勝太郎・清元延寿太夫・徳川夢声（弁士）・五所平之助（映画監督）・西川鯉三郎（日本舞踊）